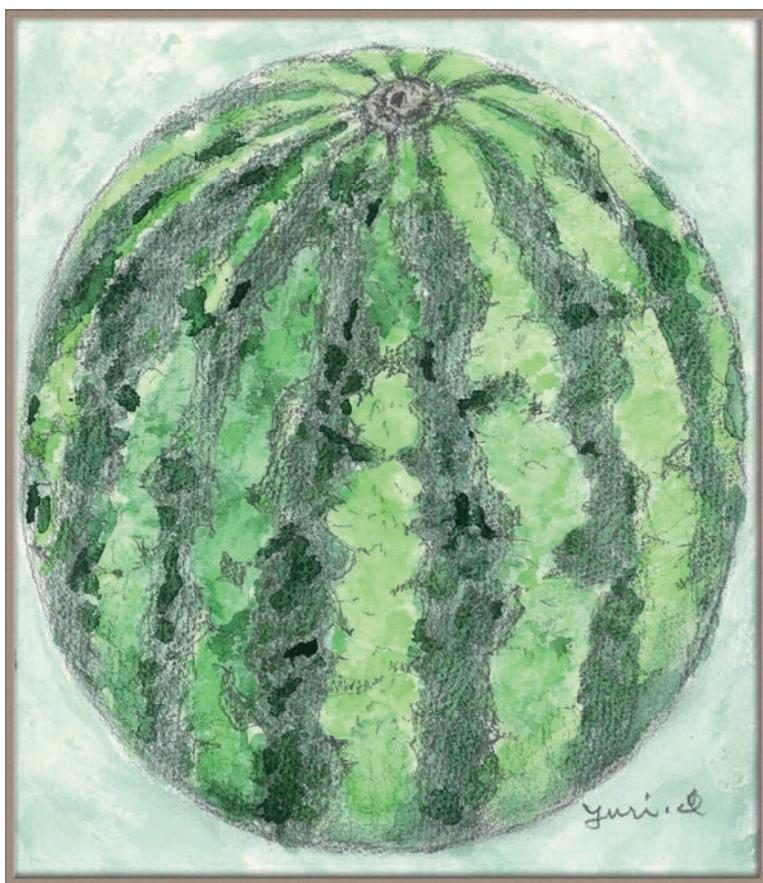


# 三河 アララギ

2021年 令和3年8月 葉月

八 月 号

第 六 十 八 卷 第 八 号

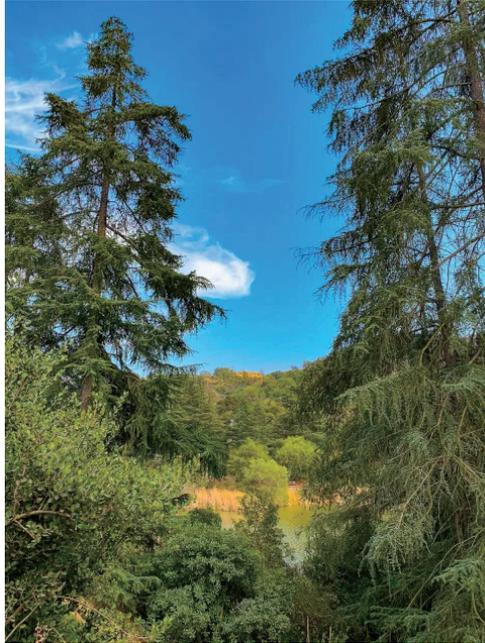


ニューヨーク日記(178) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

DISCOVERING NATURE

## Blue Shoe Diaries



本来なら今こそ旅行なんてとんでもないのだけど「仕事」を口実に結構うろうろしています。また飛行機に乗って今回はロスです。カリフォルニアはデカイし外の自然もたくさん。私たちのバブル内の人以外には殆ど会わず、その他の時間は自然に触れてハイキングなんて散歩がてらに。普段は自然ってあまり得意じゃないけどこのライフスタイルも悪くないかもね。

It's no time to be traveling in these pandemic times but we are, for "work". So back on the plane we go, this time to California. Luckily, it's pretty easy to social distance in California with lots of outdoor places to go safely. In between seeing people in our bubble, we spent time taking walks outdoors, like hiking! Being in nature doesn't come naturally but this opportunity made me realize it's not so bad. I think I can do this more regularly! Maybe.



## アカンサスの徑

御津磯夫

夕べ閉づる花はいくつもあるべきを思ひ出だせよ思ひ出だせず

百中に二三を得るも難しとぞいひたる讀みてねむらむとする

白花のハカタカラクサはびこれり夕べにみな花を閉ぢつつ

宝貝をもとめて北に進み来し民族ありき戦はずして

敷き藁にひそみ来りし一もとの田がらしの花を大切にす

病むにさへ人はひとりにては病みがたく同じ病にあひ集まりぬ

ただ二つ成りて紅に耀きゐし櫻桃のゆく方不明といふことにす

休耕田に田螺やしなひて百萬圓迦陵頻伽かりようびんがはまだ知らざらむ

トンガ王の顔黒き木彫をわれに置きて家系伝説などをメモしてゆけり

さかしらの學者ら寄りて日本の國語を乱すまたいくたびも

かぜくさ

大須賀寿恵

石垣を掩へる蔦の茂りつつ重なる葉の一つだになし

かたばみの花の匂へる縁に出でてくるま買はむかと話しつつをり

蔓遠く這ひ伸びゆきて槇垣に白き花もつ朝顔あり

わがそそぐ水にも逃げずアナナスの広葉に平ぶ青き蛙め

区切りつつ二声に啼く明け鴉吾が覚めてゐる棟のあたりに

さまざまに思ひめぐりて覚めてゐしあかときの小床に聞く明け鴉

ねむり草ははやく葉を閉ずまひる間の雷伴へる雨過ぐるとき

夫持ちしさきはひといふも知らずして教育事務所に四十路すぎつつ

事務室に吾が押してゆく職印に一人の人の休職きまりつ

部屋ぬちに培ひしことも云ひ添へて蓄ふふめるノボタン渡す

歌集 「續々草々」

今 泉 米 子

朝々に見つつ変りのなきごとしわが窓の下の青き坐り葉

手のくぼに梔子の実の余りつつ摘み終りたりよき日続きぬ

庭のみちに置きてゆきたる青菜あり緑よろしと吾言ひたれば

常なるもの無きは淋し糸窓下の緑坐り葉は昨日取りにし

北の庭の冬篁に五位鷲のことわりもなくまた住みはじめ

天皇の料理番に習ひしこと思ふ過ぎゆきにけり五十年あまり

長生きをして下さいと患者より夏病みをせぬまじなひの餅

仕舞ひおく結城紬の寸をつめて常着にせむと思ひつつる

老いふたり古り棲む屋敷に小鳥らは水浴みに来る水呑みにくる

拭きあげし窓のガラスに小鳥らは蹲ひの水跳ねて沐浴

かぜくさ

牧野 錬子

乗り合へる若き二人に貰ひたる一つ笹餅夫と分ち食ふ

川宇連の大き花の木めざしゆく山に蕨があるかも知れぬ

縮緬の如き細波ただよひて宇連ダムの四月萌ゆる木を見ず

宇連ダムの橋より見下す谷の間に山路群れ生ふるひとところあり

板打ちて閉ざせる家よりひきかへす坂宇場川の流れ急なり

癩者のまつりしならぬ石仏一隅にいくつよせて乱るる

窓もなき十八間戸の扉の一つわが押し開くかひなに重く

伝説の鏡の池を散り覆ふ落葉はしるし馬魚は見えわだかず

杉菜食ふと聞きて来たりし鏡池馬魚と云ふを泳ぐ見ざりき

写生旅行の夫に従ふいくたびか今日は駒ヶ岳の峰の花畠

「びやくしきびやつこう  
白色白光」

蒲郡 岡本八千代

今朝もまた白き紫陽花白く咲き何事の不思議無かりし私

鳴海より土つき紫陽花もち来たりて植ゑて下さりし人よ今亡く

午後よりは梅雨の降り出し白咲きのあぢさゐに光るその白光り

天あまつ人となりたる君の写真をばやうやくにして終はむとする

つくづくと長生きしてゐる己をば不思議と思ふ梅雨ふるこの夜半

刻々と更け夜となりつつこの今も本をばめくるわが音のみにして

暈の上立ちて歩けるその音のよぼよぼの音のあはれなるかな

わが歩むよぼよぼの音いつまでか続くかは知らずたゞにそのまま

今宵降る雨音聞けば雨音の聞こゆることがありがたきかな

独りに憂い<sup>うれ</sup>独りの自由のかなしけれ誰かに生かされてゐるごときわれよ

けふもまた青卷蚊取線香を燻らせて我思ふ故に我はありつつ

暑さをばやうやう感じつつ次々と浮かびくるかなわたくしのこと

テレビにて男と女<sup>おのこをみな</sup>のちがひをばわれなりに感じ思ふ夜かな

あつあつの己が沸かししこのコーヒーに朝が始まるありがたさかな

子規の著の「歌よみに与ふる書」左右におきて今日のわたしの豊けさよ

## 水無月も

豊川 弓谷 久子

夫病みつきし六月一日巡り来ぬ楽しからざる思い出ばかり

病名は脳血栓なりき二十二年常臥の身と夫はなりたり

洗濯物干す子を手伝ふ梅雨どきと思へぬ今日の青空のもと

つば広の帽子かむりぬ朝より今日の暑さは真夏の如し

自分の身は自分で守ると東京のまさ子さんより電話を貰ふ

身近まで迫りているかと新聞のコロナ感染者の数をまず読む

すかし百合の花咲き揃いぬとき色のやさしき色にいやされてをり

丈高き純白の花八重咲きのこの百合の名はマイウエディング

始めて見る花の蕾のふくらみぬレッドカサブランカの赤き蕾よ

こもりゐるくらしも楽し夏物の子のスカートを今日は縫いをり

ワクチンの濟みたる姪が明日は来るちらし寿司等作りてやらむ

雨雲のかすり行きしかかすかな雨の通り過ぎ行き又青空となる

くれないゐに色づく秋を楽しみ待たむコキヤが一むら庭の一隅

学校も休みとなりて親も子も共に田植せし昔を憶ふ

水無月もはやばや過ぎぬ曇り空むし暑き日の一日暮れ行く

# 「宇宙にて」

東京 今泉 由利

自らの自らのための自粛にて慎みをらむ静かにをらむ

大方の魚の眠る満月のサンゴ産卵すこやかにあれ

父母の和歌のリズムの内にして私の一世私のリズム

深海の海底火山の熱水噴出口黄鉄鉱に原核生物誕生

岩石のグラフィイトなる物質に生命のもと芽ばへりと

地球なる原核生物の誕生にて人間の基となりたることよ

隔も隔も長く懸かりし時の間に人の命のめばへしことを

こんなにも長い時間に連らなれる私の命やさしくなるふ

クシナガラにて最後の布教をされたこと八十歳のお釈迦様

沢山の貴き物事残りある立派な地球を感じてやまぬ

「ウリジン」を「シュードウリジン」に置き換へて炎症反応を抑えるといふ

カタリン・カリコ博士・ワイスマン教授開発のワクチン我が身に

点でありき「原核生物」よりはじまりぬ人類を救う出来事は

「地球にて」生きこしことよ誘はれて「宇宙にて」に入らむとす

飛行機の窓を埋めて粒粒粒雲の粒子に出逢いし日あり

水張田

豊川 安藤 和代

朝顔のグリーンカーテン作らんとその日を思い種落しゆく

陽よ注げ雨よ降れふれ朝顔の発芽を待ちてことばかけをり

降り続く雨にも負けず馬鈴薯のしかと畠に紫咲かす

就職の孫の名刺よ吾が胸に宝の如く深く抱きしむ

細葱の根本を鉢に植えおけばみどりつくつく葉味いっぱい

雨にけむる弓張山脈今日ひと日墨絵の如し窓に見てをり

世は変り人の心も変りたりバラは真紅を尚強く咲く

水張田は夏草夏雲静かに写し田植待ちいる

雨にぬれ寝ぐらへ急ぐか鴉二羽吾が町コロナ感染者減らざり

梅の実のやや色づけば陽の光まぶしくありて夏深みゆく

## 歌考える

春日井 清澤 範子

三人の暮し又刺かれたり風の吹く日の夫の入院

三度目の入院Sの字結腸癌の手術また一つの山

大腸につなぐ手術は五時間かかり娘と二人心に耐えて

この吾は車の運転出来ずして娘に頼る今日の運転

大手術夫は決意す娘と吾と三人の暮し又出来るため

吾八十三歳もの忘れ多くして種々の手続きに疲れいる今日

応接と座敷の室も亡き父の知恵のかかるものばかりなりけり

OA機器も吾には出来ず亡き夫の知恵のかかるものばかり

夫亡き後娘と吾の暮しなり吾斜視外来になりいてつらく

あれもこれも気持の整理つかなくてそつと起き出し歌考える

エーツとくと考えながら娘の電話市役所年金課に今日は二人で

夫の生と戦い生きるもコロナ禍で見舞も出来ず容態急変す

故郷に帰れぬ日々の  
大阪 伊藤忠男

この年の見納めなるや虫狩り時を忘れて離れ難しや

提灯で足元照らし夜道行く遠くに見える我が家の明かり

ワクチンに頼み乗り切る試みも供給足らぬ想定外か

今日もまたリモートワークに疎き事晴れか曇りか今は何どき

ワクチンの効き目を信じて二週間指折り数え待つはその日を

故郷に帰れぬ日々の長き事味を忘るやちくわに赤みそ

今日は孫教える日とて菓子どころ寄るも楽しき会社の帰り

何気なく調べてみてはと医師言われ病見つかり命助かる

心では気配り努力心意気それさえあればでも揺らぐなり

感動を忘れぬ人生喜びに事欠かぬが口癖のはず

## 黒南風

東京 矢崎直人

夜の更けて降り出せる雨窓打てば歌への扉心開ける

ダダダダドドドドドドドドダダダダ滝壺の中居るかの如し

黒南風に広げた傘を回されて坂登りきる橋の上にて

五月晴れ歩くと暑き真つ昼間風心地よき散歩日和に

六時間高円寺から亀有へかち歩き足マメでき痛む

高円寺西新井大師徒歩で行き団子屋の人驚かせてみる

順番に燕の子飛ぶ近くから段々遠くぎこちなく飛ぶ

鳴き声の珍しき鳥屋根の上ジツと眺めて猫の気分に

夕焼けの雲の波間の空の海泳いで鳥の並んで帰る

小さくて黄色い花の咲くトマト緑色の実日に日に大き

## 夏至の日

東京 森岡陽子

畦道に一羽の鷺は佇みて見つめる先は手植ゑの農夫

雨上がり濁りし池の辺満ち満つは片白あふるる半夏生の

突然の激しき雨と風の中折れるが如しの竹林の姿

坂道の真ん真ん中の白い家ブーゲンビリアの垣根ハワイアン

生き生きと夏の日差しの青芝に子雀遊び子雀啄む

夏至の日に自粛の散歩時ずらしカフェに寄り道夕暮樂しむ

眩しさに細目で見る先バス停の日傘の人は待ち合せし友

石垣に凌霄かづらの茎の伸ぶ垂れし先に一つ花咲く

アパートの建ち並ぶ路地十葉の密集に混じるポツリ蛇苺

## 散歩道

豊川 白井信昭

孫とゆく御馬を巡る散歩道新幹線の幾度も見ゆ

用水縁へりに伊勢湾台風高潮の潮位標すぎ港をめぐす

大草の「海岸復興の碑」傍に御野立所跡石碑かわらず

行幸いでましし天皇皇后両陛下かの日かの時胸に抱きつつ

日脚のび夕日うけつつ堤防を涼みゆく今日ついに赤根まで

遠足に來し丸山の海岸に遊びしことも遠くはるけし

轟音を響き渡らせ輸送機の妻との会話を遮る一瞬

この魚土色にも似て高価なり一体どこの海にいたのや

繁り合う御津磯夫記念館道辺の上に咲くはノウゼンカズラ

わが植えし高野槇高く伸び立てる枝整いて緑陰

## 記憶から

蒲郡 杉浦恵美子

我が祖母に波留野と付けしはその夫ぞ叔母より聞きぬ初めて聞きぬ

新婚の妻に波留野と宛字せし祖父なる人の人柄思ふ

八人の遺児を抱へて仕立物の世過ぎをしけり波留野と云ふ人

恐らくは名とは時にその人の生きる支へとなるかもしれぬ

空家のち売家壊され更地にと一年経たず通ひ路の家

三階に届く枇杷の樹真つ先に伐られて空家は壊されにけり

ブルトーザー頑丈門扉も一気なり我が通ひ路の家壊されぬ

最早今通ふ度見しかの家も我が記憶から薄れて行くらん

夏至だよね今年も夏が過ぎたよねせつかち夫のいつものことは

夫は麦酒片手に我ははて何をしていたかしら夏至の夕暮れ

## としのせい

豊川 山口千恵子

暗闇に小さき音に聞くラジオ日付変はりぬ時報は告げる

ラジオの音小さくしぼりて聞きてをりこのまま眠りてしまひてもよし

としのせいと整形外科医は言ひにけりわが腰痛を訴へるるに

摘み取りて赤き苺を箱いっぱい届けくれたり雨降る午後

つやもよく苺ジャムの出来上がる香りてをりぬ二階の部屋まで

田の道を歩き行けばひろがれる植田の中に水張田一枚

梅雨の雨降り続ける一日なり庭の楓の徒長枝目だつ

マスクかけいつもの道を通りつつわが行く所はいつものスーパー

救急車に行きてそのまま帰らざる友の庭の泰山木の花

交はりを断ちて久しき人のこと草とりながらふつと思へり

伊良湖岬へ(3)

豊川 夏目勝弘

しばし立ち恋路ヶ浜より先ず見るは古人いにしえの鷹射ちし山

夏鳥のサシバは南の何処の島ぞ骨山ほねやまの空は淡き青色

宮山の原生林のその上を四羽のトビが円を描けり

円描き飛ぶはトンビの習性にて原生林の低きを巡る

電線に三羽のトビの並びをりサシバも同じワシタカ科なり

空飛べるは鳥のみならず時どきは夢に優ゆうと我も飛ぶなり

我が横を並びて飛びゐるアジサシの長き尾羽根を指にて摘み

伊良湖岬を歩み歩みし一日なり目覚めることなく明方の夢

芭蕉の句を読みても唯ただ字句のみを追ひてゐるのみそれのみのこと

ひたすらに高みを求めし芭蕉なりや終りのあらざる深みといふを

俳諧を窮めんと享年五十一歳息絶えるまで推敲せしとぞ

伊良湖岬を廻りて早や一ヶ月庭のネムの木に若芽たち立つ

まだしばし籠らねばならぬ日日つづくネムの花咲くを楽しみとして

剪り詰めしネムに細き枝茂る今年の花は咲くや咲かざるや

無情にも日月は疾しとこ永久とわにこの世に生きるを許してはくれぬ

『ハルノカ』

西浦公民館 いーはとぶ

ひもすがら雨の音激しこんな日は「秘密の花園」読みてすごさむ

山崎 俊子

曇天の空より細き雨の降る甘茶の花咲きまう梅雨入りか

久しぶりの迫道せごみちゆきて戸惑ひぬ見馴れし家の毀たれて草々

三田美奈子

友は逝きその家もはや毀たれて広き売地に小さき立札

今はただ一日ひとひ一日の愛ほしき母夫我が子孫こまごの暮らしよ

水野 絹子

接種予約電話をしても繋がらぬコロナ騒動けふもうんざり

夏野菜種まき苗植ゑ年毎に急かれる気持ち強くなりつつ

牧原 規恵

梅雨入りの雨間にわれは野良仕事あまた降り出し雨にぬれつつ

夫の後遅れて歩む散歩径海へと続く初夏の径

稻吉友江

丸二年逢へない孫の成長を画面にて知る少し詫びしよ

萌黄色のワンピース着て出かけやう年度初めのけふの会に似合ふかも

鈴木美耶子

白シャツの高校生らしきが自転車をグイグイこぎ行く春の坂道

軒下に年中過ごしたる君子蘭見事に花つけすこやかなる様

吉見幸子

いつぞやに友よりの花白山吹よ枯木となりても腋芽出でをり

「やられた！」羽音はせぬに右膝にはやも五月に足長蜂禍

牧原正枝

あれほどにブスツと刺されし右足のズボンには穴の見当たらずして

束の間の梅雨の晴れ間の山の間をうさぎの如く雲馳りゆく

森厚子

梅雨の間の雲におほはれしけふの宵スーパームーンも月食も見えず

## 現代学生百人一首

東洋大学

天敵のニギビ一つぶ発見しおでこをめぐる陣地争い

目黒区立第八中学校一年（東京都）

大滝菜々花

大国の圧に屈さぬ人々がマスクとともに自由をさげぶ

神奈川大学附属高等学校二年

福井拓己

日本地図眺めて祖父はつぶやいた「俺の生まれた満州はない」

慶應義塾普通部二年（神奈川県）

武晃志

ガラケーもスマホも何も持ってない現代にいる原始人ぼく

慶應義塾普通部二年（神奈川県）

原藤直

帰り道惰性で買ったマシユマロに救われるような夜もあります

慶應義塾湘南藤沢高等部二年（神奈川県）

天<sup>あま</sup>田<sup>た</sup>憲<sup>けん</sup>壮<sup>そう</sup>

コンビニでレジ打つ昔の同級生他人行儀に小銭を払う

慶應義塾湘南藤沢高等部二年（神奈川県）

川<sup>かわ</sup>上<sup>かみ</sup>咲<sup>さ</sup>希<sup>き</sup>

言葉の壁超えて過ごしたカナダの地不安と期待は自信と希望へ

中央大学附属横浜高等学校一年（神奈川県）

黒<sup>くろ</sup>澤<sup>さわ</sup>せり

一瞬の風を率いて舞う札は古<sup>いにしえ</sup>からの恋の懸け橋

中央大学附属横浜高等学校一年（神奈川県）

森<sup>もり</sup>裕<sup>ゆう</sup>奈<sup>な</sup>

贈呈誌

森岡陽子

青森アララギ 第四百十四号

- 手直しの衣類を着けて足らひけり正月生まれの今日九十三歳 内山愛子
- 我滑るスキーコースを横切りぬエゾリス素早く木立に消えぬ 安住晶子
- 急かれる事もなくなりゆつくりと長閑に過ぐすも老いのゆとりか 三上信子
- 春陽さす庭の残雪日ごとに消え芽吹く水仙をちこちに見ゆ 相馬富美子

冬雷 2021年 7月号

○紅あせて夕雲しづもりゆく空に茜を保つひとつ雲あり

水谷慶一郎

○さやさやと緑葉鳴らし倒れたる山茶花の鉢の幾年過ぎき

櫻井一江

○天の川銀河のなかの太陽系惑星に生きるまたたきの間を

橘美千代

○小判草と持ちくれたる鉢に実が付きて微かな風が黄金を揺らす

高松美智子

○地に落つる青梅かをることなく褪せることなく数日青し

大塚亮子

○衝立に挟まれひとり飯を喰ふ意外と落ちつく新しき様式

中村晴美

○仁王立ちに沖を凝視する船頭は「よし」と船子に出航告げゐる

田端五百子

○突然の光に右往左往する蟻に驚く植木鉢上げて

鈴木やよい

○虎杖に絡み咲き継ぐ小昼顔貨物軌道に沿ひて広がる

野村昭一郎

○老木の櫂の幹は艶もちて四方に若葉の枝広げ立つ

桜井美保子

○カマキリの孵化したる様視ておれど根気続かぬ齢になりぬ

山本三男

## 青春の詩 その一

高橋育郎

また逢う日まで

新潟で今年 高卒の二人 別れの時が来た  
白山神社の 太鼓橋が別れ道  
振り返れば古町通が一筋に連なり  
二人の足は止まった

折しも街頭放送が「別れの曲」

あまりにも偶然の音楽

別れがたい二人は 近くの汁粉屋に入った

小さな卓を挟んでの会話

ゴッホが片耳を落とした

ゴーギャンがゴッホと別れたのは何故か

お互い理解しあっていたのだろうか

芸術家同志の交われない宿命か

会話ははずんで 店を出た  
君よ 日展に入選してください  
別れに曲は 終わっていた  
二人は この別れ道で 別れた

○君へ

空を見上げて  
髪をのびした 新顔の大学生  
窓から乗り出して ポーズをとった  
天真爛漫 時節(とき)は春  
桜は幾重にも 咲き誇り  
幸福な二人の友を カメラに収めた

空はどこまでも 広が  
ついに果てた 東方のもと  
僕は別れて行く 親友(とも)よ  
僕らは 文通しよう  
手紙を書くことが 強く美しく思えた

『俳句』

潮の香の網戸抜けくる島泊

山元正規

狛犬の口開けてゐる暑さかな

夕闇の闇吐くやうに暮蛙

夕星やソリストとなる河鹿笛

松本周二

ゼラニウム剪れば不実の匂ひして

鈍色の東京湾の梅雨入りかな

包まれていとし子の如枇杷届く

重野善恵

梅雨ぐもり太陽の位置灰白し

門柱に守宮と知れる薄明り

池の辺に白の群なす半夏生

森岡陽子

紫陽花や磴のかなたの奥の院

明け方の鴉鳴く声額の花

どん天の腹まで響く暮の声

田中清秀

傘立てにそのまま戻す梅雨の晴

風そよぐ蜘蛛の囿光る峠道

猫柄の相合傘や梅雨に入る

浜田紀政

花泥棒誘ふが如く垣の薔薇

マネキンの波間漂ふ春の海

橋下に五羽の合唱ひなつばめ

木村歩歩

忍び音も朝には悲鳴ほととぎす

サックスの女子に川風臯月晴れ

行く末を見据え青鷺凜と立つ

六月の風の大川橋の上

矢崎直人

六月や歩ひて大師の草団子

六月や歩ひて亀有「両さん」像

鉄線や弘前こぎん研究所

今泉如雲

夏の夜の地球の影の赤さかな

蓬田てふ村の走りのトマトかな

水打って宇宙空間滴らす

植村公女

パテシエのひつつめ髪や夏きざす

言ひ訳のひと言多し夕端居

江戸生まれ阿形仁王に樟若葉

今泉由利

雨過ぎぬ風吹きゆきぬ花櫛

ポケットの落梅ひとつ香りたつ

またひと葉常盤木落葉積りつぐ

白い花赤く実りぬ鬼灯市

はやばやと天辺に咲き花葵

ジャカラダ淡紫の木の下で

## かさね吟行会

### 「寺家ふるさと村」 6月

田中清秀

「珍しい鳩の浮巢が見れるわ」

「それは是非見たいですね」

みんなで揃って田園風景の中入っていく。芭蕉も「五月雨に鳩の浮巢を見に行かむ」と詠んでいる。鳩はカイツブリの別称、葦や真菰の葉と茎で水面に巢を作るのが特徴で産卵から雛のかえるまで約ひと月を浮巢で過ごす。鳩の浮巢は夏の季語である。

令和三年六月十一日、今回は寺家ふるさと村へ出かけた。ここに来るのは二回目、平成二十九年九月初秋の吟行会で訪れている。広々とした田園地帯の青葉区寺家町に、横浜市が農業振興と自然環境の保全を目的に、ふるさと村をつくった。谷戸田と呼ばれる細長く伸びた水田や静かに水をたたえた溜め池が点在する。古代から恵まれた自然環境にあり、縄文や弥生時代の住居跡なども残っている。農産物はお米の他に大麦や小麦、蕎麦、ゴマなどで、また、養蚕も行われていたらしい。

この田んぼや畑は近隣農家の所有地で勝手に入れない、また、雑木林も同じく地主の管理地で、決められた散歩道を外れての散策は出来ない。また、農作物を取ったり、ゴミを捨てたり、草花や生き物を捕るのも禁じられている。

鳩の子の浮きてはすぐに見失ふ

京子

つば広の帽子でめぐる初夏の里

清秀

目で肌で味わふ谷戸の青田風

さち子

水田に田植をする人がいた、昔のように一つずつ丁寧に腰をかがめながら植えていた。日本では古くから稲代で育った苗を水田に移し植える。その担い手は笠をかぶり華やかな衣裳に紅襷をかけた早乙女と呼ばれる女性たち、男性は苗代での苗取りや苗運ぶ役割で、本田の整地や代かきなどに従事する。そして、田植えの後の早苗饗も農民の楽しみの一つ、みんなで田植え歌を歌いながら豊作を願う御田植祭は、全国に伝承されている。ここにも、田の神を祀ったのか近くの石の柱に注連縄が張られていた。

老鷲や水田に映る谷戸の森

正規

ふるさとの声の聞ゆる苗運び

紀政

畔道に隠るるやうに蜥蜴這ふ

陽子

畦<sup>せ</sup>は田んぼを囲んで土を塗りつけ、割れ目や穴をふさぎ防水機能を持たせた「仕切り」のこと。また、畔道には多くの草花が咲き、カエルやトカゲなどの住処でもある。また、ここふるさと村には蛍が生息している、蛍は清らかな水と蝸がいないと生きられない。丁度今、夕闇が迫る小川の周りには、多くの蛍が舞い飛ぶ様子が見られると言う。

村の奥まったところには昔ながらの水車小屋があった、ここでは汲み上げた地下水で水車を廻している。昔は石臼を回して精米や製粉に使われ、コトコトと郷愁を誘う音色が聞かれたが、残念ながら今では観光用の水車がほとんどだと言う。

老鷲の谷渡り聞く水車小屋

善恵

虎尾草や水車を廻す水の音

周二

谷戸の風身に引き寄せて枇杷熟るる

素山

ふるさと村の総合案内所は農業、自然、人文関係の展示場や手作り食品の実演、天然記念物ミヤコタナゴの育成展示などふるさと村の中心的な役割を担っている。また、散策案内や四季折々の動植物の情報発信など年間を通じて行っている。研修室も利用可能で今日の句会場として使わせてもらった。いつものように嘯目三句出し四句選で和氣藹々と楽しく行われた。

のんびりとした田園風景、珍しい鳩の浮巢、緑濃き森林、田植えや水車小屋の水音など都会の喧噪から離れ、俳句の世界に没頭しながら、至福のときを過ごすことが出来た。

寺家ふるさと村憲章

「自然や農業は私たちにとって宝物だ。

遠い昔からこの土地には

すべての生命をいつくしみ

重んじていくことの素晴らしさが根付いている。

人も同じ生き物だから

思いやりとやさしい気持ち忘れずにいたい。」

『酔いの徒然』(一一二) 丸山酔宵子

『センチメンタル・ジャーニー』

横浜市磯子区中原町688-2。

これは、筆者が生を受けた場所である。新潟生まれの海軍職業軍人であった父と鎌倉材木座生まれの母と2歳上の姉が住んでいた海軍住宅である。その後、3歳年下の妹と5人家族で戦後のどさくさを過してきたわけである。

まだ東京湾が中原の入江近くまで迫っていて、風光明媚な屏風ヶ浦と杉田の中間地点に位置する。遠浅の浜では潮干狩りや海水浴を存分に楽しむことができた。その海岸の前には横浜市電が終点杉田まで走っていて、毎年夏の横浜開港記念日には、本牧方面から打ち上げられる大花火と電飾飾りをいっぱいつけた花電車を見に行った記憶がある。

記憶を呼び起こせば、家は粗末な一戸建てであるが、木造りのしつかりした門があり、玄関のガラス戸を開けると小さな上りの間、右に茶の間と奥が炊事の土間そしてその奥が6畳か8畳の寝室兼の奥の間があった。小学

校時代は銭湯に行った記憶がないので風呂もあったのであろう。つまり、今様に言えば木造2DKであろうか。

家を出て道路に出ると真ん前に門構えも堂々とし、境内には鐘楼、奥には広大な墓地も揃えた浄土宗願行寺があった。春や秋の彼岸会特に盂蘭盆会では、本殿が豪華な垂れ幕に覆われ、紫の袈裟を着た僧侶たちが集まり、子供心に何が始まるかとワクワクしたものである。

屏風ヶ浦から中原を通って杉田の商店街の手前には杉田市場があって、生鮮食品や駄菓子、雑貨、衣料などの雑然とした市場があった。母親によく連れられて市場に行ったとき、「ここが美空ひばりの魚屋、魚増さん」よ」と教えてくれた。美空ひばりはそのころから天才少女歌手として有名で、「おい、今度、杉田劇場に美空ひばりが出るぞ・・」と近所の悪ガキが教えてくれたものだ。戦後7年程たち日本国内も落ち着いてきたのか、近くの幼稚園に1年通ったのち、家から10分程度の横浜市立杉田小学校に入学した。給食袋をランドセルに括りつけて、健気にもせつせと通っていた。明治6年創立の古い木造の建物で、先ず教えられたのが校歌であった。

春さがけの 梅咲いて

屏風ヶ浦の 山々は

希望を うつつ

みどり影かげ

誠は匂う 杉田校

未だ頭脳が柔軟で記憶力が爆発的に旺盛な小学校時代に覚えたことは全く忘れていない。リズムも鮮やかに蘇り歌詞とともに今でも大声で歌える。

横浜市民として校歌とともに覚えさせられるのは、「横浜市歌」。作詞・森林太郎（森鷗外）作曲・南能衛の明治42（1909）年横浜開港50周年記念に披露された名曲である。

わが日の本は島国よ

朝日かがよう海に

連りそばだつ島々なれば

あらゆる国より舟こそ通え

されば港の数多かれど

この横浜に勝やあらめや

むかし思えばとま屋の煙

.....

と続く朗々たる歌詞を持つ感動的な歌である。長野県民は県民こそって県歌である「信濃の国」を覚え愛唱しているとのことであるが、その当時の横浜市民の多くは横浜生まれの横浜育ちの「浜っ子」で、誇りをもって歌ったのだ。

「最早、戦後ではない！」池田隼人の所得倍増計画とともに未曾有の経済成長期に突入し、本牧から金沢八景、追浜に至る素晴らしい海岸線は埋め建て尽くされ、高速道路やモノレールが貫通し、近代工場の乱立である。それに伴い、近郊の山々は分譲地や団地として開発され、近隣都市からの流入者が激増し、極端な人口増加が始まったのである。

新型コロナ緊急事態宣言下、5月の爽やかな昼過ぎ、葉山への墓参りの帰りに横須賀横浜道路（通称・横横（よこよこ））を途中で降りて杉田、中原、願行寺にセンチメンタルジャーニーである。ドキドキ：ワクワク：。有りうべくもないのだが、昔の懐かしい人たちに会えるのではないかとふと思ったりするのである。

杉田から中原そして願行寺へ通ずる道路は容易に確認できたけれど、「えーっつ、こんなに道路狭かった・・・。こんなに杉田と中原は近かったのか・・・。願行寺はこんなに貧相だった・・・。」

将に浦島太郎とガリバーになった境地である。

葉山行く窓に飛び込む青嵐

花添えて墓前に線香風薫る

酔宵子

# 楽しい時間 105

山本紀久雄

2021年6月30日

## 九代目市川團十郎・・・其の十一

ここで改めて九代目団十郎をアララギで掲載している意義を確認しておきたい。

それは歌舞伎界の第一人者としての九代目をただ追うものでなく、文明開化を志向する明治という時代の波濤のもとで、江戸期で創られた「伝統」がいかなる変容を遂げながら、新たな「伝統」にまでなり得たのかを解明するためであり、その背景には「山岡鉄舟」から大きな影響を受けていたことを立証したいのである。

さて、明治12年（1879）2月の新富座公演で、九代目は大成功を収め、これまでにない展開を見せた。それは「新たな観客層」の獲得であった。新富座での演目は『勸進帳』である。九代目にとって10回目の『勸進帳』であったが「古今無類の大出来」と評され、興行的にも「近來稀なる大入」となった。このとき九代目は、従来と異なる拵（かま）で弁慶を勤めた。

《十回目の勸進帳を12年2月に新富座で演ぜし時弁慶は素顔に地（東京名所之内 第一の劇場新富座）三代目歌川廣重画》



天窓にて眉毛も格別たくせず、白粉も少しも施すことなく、例の睨みの時も、例と違い（ツケ）なしにて、都て能がりなりし、この時大入大當りにて六十日間興行》と述べたが、加えて《貴とき御方の教授を受けた》と加えた。この人物とは元土佐藩主・山内容堂である。九代目は、容堂から贈られた能装束を着けて『勸進帳』弁慶を勤めたのであり、上流階級ともいべき社会的立場にある新たな後援者の愛顧を得るようになっていた。

さらにもうひとつ思わぬ効果を生み出した。否、「思わぬ」ではなく「意図したとおり」と言えるかもしれない。それは「従来歌舞伎を支えてきた観客層とは異なる人たちの嗜好に適う芸」となっていたのである。具体的には、この明治12年新富座に横浜に居留していた外国人が見物に訪れたことである。

外国人の観劇を促したのは、初代陸軍軍医総監を務め、晩年の九代目の診断にもあたった松本順と、当時外務官僚として活躍していた吉田清成である。こうした機会が実現したのは、観劇を斡旋した彼ら官僚が『勸進帳』をはじめとするこの新富座興行を、「外国人の目に触れるものに足ると判断した」ことによるで、そこには九代目が示した工夫・変化があった。

弁慶に扮した九代目は、隈取はおろか「白粉を少しも施すことなく」素顔で舞台を勤めたのである。九代目は「役者が役を務める」ものでなく、「役者が役に扮して舞台にあらわれた瞬間から、ある。九代目は、役者が役に扮して舞台にあらわれた瞬間から、『口』であつて己でなくならなければならぬ。芝居の世界のなかで自己以外の者として生きていくことを実現させたのである。

《私が最も苦心したのは、第二に喜怒哀楽の念を観客に起させるは何だろうかと思ひました。種々考へた末どうしても貌と眼とに在るものだと思ひました。シテ見ると是までのやうに真白に白粉を顔へ塗て居ては、逆も見物を真実に感動させる事が出来無

と知ったから、先ず面の白粉を薄くして見ました》(『桜痴居士と市川團十郎』) 参照『明治歌舞伎の成立と展開』筆者注 桜痴とは福地源一郎)

九代目は、自らが獲得した役の「精神」に基づいて「喜怒哀楽の念」を見物客に伝えようと「苦心」した結果、役のあらわす「喜怒哀楽の念」を見物客の「事実」となす役割を、貌と眼に託していったということになる。

言い換えれば、九代目は自身と同様の追体験を見物客にも想定したものと指摘できる。それだけに、「真白に白粉を顔へ塗ることは、顔の表情を遮断してしまいう行為であり、それは、役と一体化した役者と見物客との間に想定される感情の疎通を妨げるもの、すなわち「見物を真実に感動」させることができなくなるものとみなしたのである。

これが「大入大当りにて六十日間興行」を続けるほどの「感動」を見物客に与えていくことになって、ついに九代目の『勧進帳』は、明治20年(1887)4月、井上馨外務大臣邸での天覧芝居に至るのである。四日間にわたり催された天覧芝居は、当時《古今未曾有前代未聞御盛事》(『横浜毎日新聞』明治20年4月28日)と伝えられた。

天覧芝居以後、九代目は英米の新聞、雑誌、書籍に頻繁に登場するようになっていく事実を、『英文資料から読む西洋人の見た九代目市川團十郎』(宮智麻里著 佛教大学大学院紀要第46号 2018年3月) から掻い摘んで説明したい。

日本の俳優に関する記述で多いのは団十郎、川上音二郎・貞奴、左團次であるが、団十郎は突出して多い。最初に登場するのは明治8年(1875)だが、天覧芝居が行われた明治20年以降「Danjuro」の名が頻繁に登場するようになっていく。

九代目は明治36年(1903)9月に66歳で逝去したが、その

2年後の明治38年(1905)には、「日本で最も偉大な俳優は市川團十郎である」という一文が多くの新聞に掲載されており、死後も名声が続いたことをうかがえる。

では、どのように取り上げられたのか、いくつか例示しよう。

1. ダグラス・スレイデン(Douglas S. Sladen)は、著書『The Jap at Home』(1886年刊)の中で、あるアメリカ人の発言として「彼は団十郎のしかめ面やしぐさから芝居のすべての言葉を理解できたと言った」と紹介し「バンクーバーを出発する前からアメリカ人乗客は偉大な団十郎と日本の演劇の名声について話を始めた」と記すほど、訪日の際に観るべきものの一つに数えられるようになった。

2. 駐日ベルギー公使のアルベルト・ダネタン男爵夫人は、日本滞在日記『Fourteen Years of Diplomatic Life in Japan』(1912刊)の中で、明治27年(1886)6月18日に『忠臣蔵』を観て、団十郎の演技は堂々としており、「表情がすばらしく、ほとんど英訳に目を向ける必要がなかった」と記している。

3. 明治23年(1890)以降、団十郎の偉大さを示すために度々その収入が紹介されるようになった。明治23年5月に掲載された8紙が、総理大臣の年収が9,600ドルなのに対し、団十郎は新劇場で33日の公演で3,500ドルを得ると掲載。

4. 日本の総理大臣よりも稼いでいる俳優という評価はさらにその名声を高め、英国の日本研究家バジル・ホール・チェンバレンは『Things Japanese』(1886年刊)の中で「現存する日本の最も偉大な俳優は市川團十郎である。東京を訪問する者は彼の稀に見る演技力とダンサーとしての敏捷性を発揮しているのを見に行くよう努力したほうがいい」と書いている。その他ここに書ききれないほど高い評価を受けている。続く次号。

## 絹の話 (129)

「アトリエテレビ」今泉雅勝

### 絹と三味線

#### 三味線との出会い

終戦後間もない田舎町でも春の桜まつりには舞台など設えて、歌舞音曲など大音声で奏で、今から思えば信じられないほど賑わっていました。その中心は何と言っても脇役ではあるが三味線であったように思えます。

三味線の音色は上品さには少し欠けるが、花見客の雑踏の中でもなんとも人の心を捉え、ワクワクさせ、余韻が残り、子供ながらに大人の世界にちよつと足をかけさせてもらって背伸びしている様な気分になったのを懐かしく思い出します。

また春の村祭りの芝居小屋で太棹のベンベンという音が耳に残っています。

当時ラジオなどで津軽三味線や三線（蛇皮線）の音が聞こえて来るとその不思議な音階に足が釘付けになったのを覚えています。同じ様に都内の駅の入り口等で若者が一人津軽三味線の演奏をしているのにも足を止めまし

た。

当時、津軽三味線の名人と評された盲目の高橋竹山の都内のアングラ劇場での演奏会に行ったところ、小さな会場は若者の男性で満員、通路に腰を降して聞き入りました。あるものは師の指先を凝視し、目を瞑って聴き入る者。叩きつける強烈なバチ捌きなのに何処か寂しくて悲しげな演奏が終わって瞬時感動の沈黙があり、その後拍手が湧き上がるのに一期一会を覚えた事を思い出します。

また、東京の赤坂で店舗を構えていた頃、新内の鶴賀師匠が衣装のオーダーに来ているうちに新内教室に入る事になり、新内の哀切を帯びた音色と即興の歌詞に心を惹かれ、三味線の構造なども教わりました。

#### 三線のルーツ

今日の三味線は中国の「三絃<sup>げん</sup>」（秦の時代から演奏されていた絃楽器）が琉球に伝わり三線となり、室町時代に日本に伝わって、琵琶法師や盲目楽師らによって弾き方や形体の検討が繰り返され、歌舞伎などの様々な音曲の発展と相まって、江戸から明治時代に民衆の楽器として全盛を迎え、長唄などに使う「細棹」。民謡、地歌、常磐津、清元や浄瑠璃（含新内）で使う「中棹」。義太

夫や津軽三味線に使われる「太棹」の三種類に大別される様になりました。

### 三味線の弦は絹糸

琵琶、琴、胡弓など日本の絃楽器の弦には絹糸が使われて来ました。古来よりそれらの産地は琵琶湖近くの余呉湖の水を使ったものが良いとされ、賤ヶ岳から流れる水質が適しているからだと言われています。

それでは、どんな繭から作る糸が良いのでしょうか。

まず、繭は乾繭ではなく、生繰り（繭の中で蛹が生きている状態で糸を揚げる）で、糸の細い三眠蚕の繭（一般の蚕は4回休眠して繭をつくるが、3回しか休眠しない種類の繭）が良いとされています。

ただ今日では練習用には切れにくい合繊弦を使い、絹弦は本番用です。

### 絹弦をつくる

戦後西洋音楽の普及と共に急速に和楽器が衰退し、絹弦製造所も少なくなり、日本の伝統文化を維持する事が心配される様になって来ました。

絹弦を作る工程は三眠蚕の春繭（糸にしてしなやかになる）から挽いた総かほの「繰糸」（総を小棹に巻きかかえる）

作業から始まって合糸、撚糸、染色、糊煮込み、糸張り、乾燥など19工程を経て出来上がります。機械を使う工程もありますが、熟練した手作業が製品の良否を大きく左右します。

三味線の3本の糸は、三の糸では繭8粒位で24デニール、二の糸は12〜15粒で36〜45デニール、一の糸は15〜18粒で45〜54デニールになるように作ります。

### 絹の弦は心にしみる音色

絹弦と合繊弦の音色を聴き比べると、絹弦では音の振幅が明瞭に分離していて、雑音となる中間振動や振動の減衰が少なく、余韻のある冴えた音色が聞き取れるという事です。

なお、三眠蚕の生糸の弦は四眠蚕の生糸の重い感じの音色に対して、軽やかですっきりした音色だと言われます。絹弦の音は癒しの音色ではないでしょうか。

### 三味線の音色は弦ばかりではない

三味線は胴の構造、皮の張り方、棹の太さ、さらに糸、駒、撥の組み合わせなどによって音色や響きが千差万別に変ります。

## 本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田 勇氣

2021年7月7日

### 再び腹巻

雨模様が続きますと

朝が起きずらいですよね 笑

お天道様の天然の明かりで目を覚ましたいですよね

最近

声枯れ

鼻水

喉のイガイガ ムズムズ からの咳

頭痛

首の痛み

といった症状を多くみかけます

朝晩の寒暖差や気圧の問題

それに加え

電車やオフィスなどの公共の場での  
エアコンの効きすぎ

などが原因としてあげられます

公共の場では自分の感覚で温度を調節できない為  
身体が冷え切ってしまうですよね

なので

オフィスなどでは腹巻を使い

身体の冷えを腸の冷えを防いで行きましょう

オフィスなどの建物に長くいる場合は良いのですが  
それ以外は熱中症のリスクが上がるので

着けない方が良いでしょう

オフィスに置いておくことをお勧めします

氷系の飲み物や食べ物はあるべく

連日摂取せず 間隔をあけてるようになっています

今日も笑いながら行きましょう

2021年7月5日  
角度を変えて

お天道様が拝めない日々が続いています

洗濯物が困る時期ですが

以前紹介させていただいた 除湿器

この除湿器のお陰でいつもと変りなく洗濯物を

干すことが出来ます

でも 洗濯物は

やっぱりお天道様の陽射しをたっぷり含んで

乾かしたいものです

お天道様を拝めない日々が続くと

どうしてもホルモンのバランスが崩れがちになります

骨格的にも問題が出やすくなります

皆さんは大丈夫でしょうか？

イライラしたり

落ち込んだり

怠かったり

やる気が出なかつたり

人を傷つけてしまつたり

悲しくなつたり

などなど

参つてしまいますよね

そんな時は

時期とホルモンの問題ですので

自分を責めるのは止めましょう

3S をして

スマホなどの機器から少しだけ距離を取り

空や雨を楽しむようにしましょう

本当は笑うのが一番いいのですが

中々笑えませんよね 笑

口角を上げるだけでも効果があるので

マスクの下でこっそり口角を上げましょう

今日も笑いながら行きましょう

## 「江上浩二の独り言」 44 江上浩二

## 吉本隆明の強さとよわさ

吉本ばななさんの父親とご紹介した方が今の若い人にはいいのかなとも思うが、隆明氏の次女さんは吉本ばななといい、作家をされているとお話した方がいいのか迷う処だが、私にとって隆明氏は途轍もなく距離感のあった、出身大学の先輩であった。

しかし、名前を存じ上げたのはいつだったのか記憶が定かでなく、確固たるして言えることは大学の同期で隆明氏に傾倒していた方がいて、その同期から吉本隆明の名を知った次第で、二十前後の頃であった。当時は興味も持てなく、難解だという先入観があつて隆明氏の著作を追いかけることも無かった。やがて、私も大学院卒業時に結婚し、東京の田端界隈に住むことになり、現在に至っている。本当に、残念というか、それから三十五年近くも経って、マイブログで隆明氏のご逝去された時に記した短文を基にこれから呟く独り言が唯一のものに過ぎない。

2012年三月十六日にアップしたマイブログ、題目…

## 吉本隆明氏御逝去

平成二十四年三月十六日午前二時過ぎに、吉本隆明氏が御逝去された。このニュースを二時間後にネットで知った。それ自体偶々早起きをしていたので、新聞でなくネットで流れていたニュースを目にしただけであった。しかし、それから、一時間半ぐらい過ぎて、その間、私はあまり吉本氏の著作を読まなかつたので、安易なやり方で、①に紹介されている吉本氏の人となりを読ませて頂いた。八十七年間のご自身の人生を生きられ、多くの若者に慕われ、吉本氏の本をかかえていると、一端の若者だと周囲から見られることが、ある種の優越感、満足感を感じ、俺もそんな青春時代を過ごしたと思いつ返している人も多いと思つた。残念ながら、私はこの五十八年間、吉本氏には影響を受けなかつた、というより、周囲の人が吉本氏と囁いても、入り込もうとしなかつた。さて、②の人となりを読ませて頂いて、最後の103番で引用されている参考資料で、こう示されていた。

\*吉本氏は「自分なりの方法はあるけれど、個人が固有に持っている誰にも変えられない個性とか、あるいは好みとか考え方とか、そういう宿命的なものがある。それをごまかさずに深めて、抱えて生きていくことが強さになるんじゃないでしょうか」と、人の考えに寄りかからずに来られたその強さはどこから来るのか、という問い

かけに対して答えられたそうである。

まさに、市井の多くの人は、人の考えに寄りかかり、それで強さを得て、生きられるのが常である事の相反した人生を送った稀有な方であったと信じている。  
午前六時五十分記

「ご逝去から四年程して、隆明氏の短編、「背景の記憶」(宝島社)よりこだわり住んだ町が紹介されているネット記事を読む機会を得た。得たというより、偶然の必然性を鳥肌が立つ如く感じた。ご逝去の際に田端に比較的近い本駒込のご自宅で亡くなられたと報じられて、そんなお近くに居られたのかと無念の気持ちになっていた。「背景の記憶」は1994年に出版されているので隆明氏が67歳位であり、さらにこだわり住んだ町に紹介されていることが追い打ちとなった。そこで今は古書扱いになっている「背景の記憶」を探し求めて自分自身で隆明氏の記しを追った。

今はやりの地政学的には、隆明氏は山手線・京浜東北線が上野辺りから崖つぶちを通っているその下側を坂の下、崖上を坂の上と呼んで、隆明氏が若い頃に住んだ、坂の下地区で所謂下町風情がいきづいていいるという。それに対して崖上の坂上地区は非下町という言葉で表現した。少し気になったのは、無意識にとという語彙を多用し

てくることで、二三四頁の東京に住むと題されたショートノートで、

住むということは、おなじ言いまわしをすれば、いつでもその土地の内側に入っていて、もう意識にものぼらなくなっている状態だといえよう。

これは隆明氏の無意識の裏がえしの表現とした。さらに、わたしにこの状態を感じさせる東京の場所は、生まれてから思春期まで住んでいた中央区の月島・佃島界隈と、台東区と文京区にまたがる谷中・千駄木・駒込界隈だけだ。このふたつの場所に共通の何かがあるとすれば「下町的」ということになる。もうすこしくわしくいえば「下町的」な風情をのこしながら、東京のビルの立ちならぶ中心街に口を開いている境界ということになる。

読み進むと下町風情が息づいている路地を進んでいく隆明氏の姿が想像できる。残念ではあるがとおに還暦を過ぎた隆明氏の後ろ姿が、ある意味分かりやすい言葉で私の中に這い出てくる。そういう時に無意識にと表現されていて、肉体的、精神的な弱気ではなく、無意識からくる許される齡氣(れいき)なんだと納得した。

漢詩研修 (五十八)

千代田岳精会 平井茂行

花はな対たいして旧きゅうを懐おもう

紛ふん紛ぶんる世せい事じ乱みだれて麻あさの如ごとし

春しゅん夢む醒さめ来きたて人ひと見みえず

秋しゅう 義ぎ 堂どう

旧きゅう恨こん新しん愁しゅう只ただ自みづから嗟なげく

暮ぼ檐えん雨あめ洒そとぐ紫し荆けいの花はな

【作者】 釈義堂(一三二五〜一三八八)南北朝時代の高僧。姓は平氏、名は周信。空華道人と号し、義堂はその字。土佐(高知県)高岡郡の人。

正中二年(一三二五)正月に生まれた。十四歳で剃髪、比叡山に登って受戒道円阿闍梨に密法を学び、十七歳で京に上り、無愁国師につく。国師の死後建仁寺の竜山徳見を師とした。延文四年(一三五九)鎌倉管領足利基氏に招かれ円覚寺にとどまり、応安四年(一三七一)上杉氏の鎌倉に創建した報恩寺の第一世となる。康暦元年(一三七九)足利義満に乞われて京都建仁寺に住み至徳三年(一三八六)南禅寺に移ったが、同年夏、義満が朝廷に奏して南禅寺を五山の上に置くと、その秋、慈氏院に退休。絶海とともに五山文学の双壁とされる。

【解説】 春の夕ぐれに夢からさめて、軒ばの雨がそそぐ紫荆の花を見ながら今はなき旧友たちの悲しい思い出にふけっている作。「紫荆花」の故事を用い南北両朝の合一のまだ成らないのを嘆く意を寄せている。

《語釈》 ※懐旧：昔のことを思う。ここでは旧知の亡友を思う意。 ※紛紛：ごたごたしてわずらわしいさま。乱れるさま。 ※世事：世間のこと。社会の出来事。政治上の問題など。 ※旧恨新愁：以前に、また近ごろ亡くなった知人に対する恨みや愁い。人：夢に見た旧恨新愁の人たち。

## 『目白界限』

中屋保之

六月に入って間もない頃、私の住む町の揭示板に、心のふるさと 良寛<sup>〃</sup> という案内を見つけた。早速、東京・目白にある「永青文庫美術館」を訪れようと思い立った。山手線目白駅を降りると、かの学習院や川村学園、日本女子大など有名校が散在し、緑豊かな街路樹が続く静かな雰囲気に包まれる。目白通り沿いに学習院大学を過ぎると千(ち)登(と)世(せ)橋の橋げたに到る。橋下には都内有数の幹線道路のひとつ、明治通りが走っており、その横を都内唯一の都電荒川線が並走するという、まことに絵になる風景を堪能できる。都内では最初期の幹線道路同士の立体交差として、今も現役ということ、「東京都の著名橋」のひとつとされているそうである。更に歩を進めてゆくと、広大な広場が目に見え込んでくる。

その昔、目白御殿と呼ばれた「田中角栄邸」を覚えておいでの方も多いのではないだろうか。相続により約5000㎡の「御殿」の土地の一部分、約3200㎡を文京区に物納、現在は、広さ一万㎡の広大な「文京区立・目白台運動公園」として、人々の憩いの場へと変貌を遂げている。子供たちが走り回り、母親たちが談笑している姿を見ると、無味乾燥な高級マンションにさせなかつた当時の関係者に敬意を表したくなる。隣接する洋館の表札には「田中」の文字が見える。

『肥後細川庭園・永青文庫』の案内板に従って小路に入ってみると、左手に、かなり古い日本家屋の門が静かに佇んでいる。《蕉雨園》とあるだけで、よくある説明板もない。それはそれは見事な大谷石の塀に囲まれた屋敷は、明治時代に宮内大臣を務めた田中光頭の邸宅跡で、現在は講談社の所有で非公開だそうである。長い塀の中頃、小路を挟んだ反対に「永青文庫美術館」入口がある。濃い緑と小ぢんまりとした瀟洒な洋館が迎えてくれる。良寛さん

が待っている美術館へ入る。

十八世紀の中頃、越後出雲崎の名主の長男として生まれた良寛さんは、富や名声に背を向け曹洞宗の一僧侶として清廉な生涯を全うした。そんな良寛さんが晩年、四十歳も若い女性に「恋」をした、と知り俄然興味が沸いた。学校では教えてはくれない。浅学菲才な私にとつて良寛さんは、俳人としてでしか認識がなかったが、今回の「心のふるさと 良寛」を通じて、恋のお相手である貞心尼との暖かい交流を伺わせる手紙や文、大好きな酒を振舞われたことへの礼状などで癒され、また、邪気の無さと、とてつもない深慮に圧倒された。良寛さんはまた、多くの漢詩も残している。

生涯 立身に懶く  
(生涯 立身に懶く)

騰々任天真  
(騰々として天真に任す)

囊中三升米  
(囊中 三升の米)

炉辺一束薪  
(炉辺 一束の薪)

誰問迷悟跡  
(誰か問わん 迷悟の跡)

何知名利塵  
(何ぞ知らん 名利の塵)

夜雨草庵裡  
(夜雨草庵の裡)

双脚等間伸  
(双脚 等間に伸ぶ)

今回の展示で、最も心に残った作品である。

秋風至るしゅうふういた

桜台楼主人・精真

今朝醒寤こんちようせいご 秋風を覚ゆしゅうふう おぼ

袒跣窓を開くたんせんまど ひら 翠靄の中すいあい うち

首を回らせばこうへ めぐ 羅を纏うら まと 浜港遠くひんこうとお

時移り意にときうつ こころ 適うかな 露台の穹ろだい そら

秋風至

今朝醒寤こんちようせいご 秋風 袒跣開窓翠靄中  
回首纏羅濱港遠 時移適意露台穹

(語釈) ○醒寤：眠りからさめる。 袒跣：はだぬぎ、はだしになる。 ○翠靄：青色の靄。 ○羅：うすぎぬ。 ○浜

港：横浜。 ○適意：心に適う。 ○露台：テラス。 ○穹：そら。

(通釈) 朝、目が覚めたら秋の気配を覚えた。肌着そのまま窓を開けテラスに出てみると、朝靄がはれる頃であった。遠く眺めれば横浜みなとみらいが薄絹を掩ったようにして眺められる。いつまで続くかと思われた夏もやっと季節が移り、心に適う秋の爽やかな空となった。

※平成十七年だった。いつまでも残暑が続く。時には梅雨みたいに湿度が高い。とにかく夏から秋へとなかなか移らない、このまま地球は温暖化して行くのかと実際に心配する事もある。健康上もこの季節を乗り切る事が大変である。

九月十七日になって初めて秋を感じた。朝五時過ぎに、目が自然に覚めた。自然に覚めたという思いは、寝苦しい夜をしつかり熟睡した喜びがある。早朝の涼しさが床の上にも感じられた。やっと過ぎよい秋がきたかと思うと同時に、原 精龍先生に思いを致した。

この八月、佐世保に帰った折、北九州八幡まで足を伸ばした。別に相談事があつたのではない。この節、米寿を迎えられた恩師を拝顔するだけでよいのであつた。

先生は、気を遣われるご気性だからと、こちらも気を利かせたつもりだったが、駄目だった。複数の持病のうえ、八月の暑さは先生には大変難儀のように思われた。正直言って、いかにもきつそうに見受けられた。お病気は兎も角、この気候だけは、早く過ぎしやうい季節に移ってほしいものだと思つたものだ。こんな事が、頭の隅にあつたのだろう。朝の初めて感じられる秋の爽やかさが、例年とは違つてうれしく思つた。

ガラス戸を開けるとテラスの桜の木は微かに朝もやに包まれて涼しげに感じられる。

「何れの処よりか秋風至る…」私の好きな詩人劉禹錫は旅愁の中に(秋風の引)を作つた。

私は拙い詩作を試みて(秋風至)を北九州の恩師に届けたいと思つた。

觀世音菩薩心緒

今泉由利

安居あんごは浄土しょうど 補陀落ふだらく

印度インド 亞州アジア 千里せんりを馳はせ

希求ききゅうす 真言しんごん 成就じょうじゆを欲ほつす

一心いっしんの彫刻ちようこく 晏清あんせいの姿すがた

安居浄土補陀落

印度亞州千里馳

希求真言欲成就

一心彫刻晏清姿

- 心緒 || 心満ちたりる
- 安居 || 外出せず一箇所にこもる
- 補陀落 || 観世音菩薩が住むという
- 真言 || 真実のことば
- 一心 || ひとつのことに集中する

# 旅人芭蕉 (4)

## 夏 目 勝 弘

コロナの次の波が高くなってきたため。名古屋の宮の渡し、桑名の七里の渡し跡まで行く予定で、五万図を集めて準備していたがまたも地図の上の旅となる。

十二月十日名古屋から陸路佐屋に立ち寄りそこから船で桑名に、そして馬にて伊勢の杖突き坂を越える。

○かちならば杖つき坂を落馬かな 芭蕉

杖つき坂―東海道、伊勢街道の分岐点の坂。(四日市采女町と鈴鹿市石薬師町との間の坂) 桑名から四日市、石薬師、亀山、伊賀上野へとつづく道筋。

笈の小文より(桑名より處々馬に乗りて、杖つき坂引のぼすとて、荷鞍うちかへりて馬より落ちぬ、もの便なきひとり旅さへあるを、まさなの乗りてやと馬子にはしかられながら(かちならば杖つき坂を落馬哉)といひけれども、季の言葉なし。雑の句といはんもあしからじ)とあるように、この句は季語のない句としても有名とか。

倭建命が伊吹山の神、白猪の大氷雨に打たれ、足え歩かずとなった。いたく疲れ、杖をついて歩いた。そこを杖つき坂と名づけた。

芭蕉の杖つき坂は倭建命の杖つきを引いている。(今泉忠芳説より)

旅の途中さまざまなことを経験しつつ古郷に向う。

○冬の日や馬上に氷る影法師 芭蕉

そして古郷への万感の思いをこめ

○古郷やへそのをに泣く年のくれ 芭蕉

次のように書き残している。

(代々の賢き人々も古郷はわすれがたきものにおもへ待るよし。我今ははじめの老も四とせ過て、何事につけても昔のなつかしきままに、はらからのあまたよはひかたぶきて待るも見捨てたく、初冬の空のうちしるるに至

る。猶父母のいまそかりせばと、慈愛のむかしも悲しく、おもふ事のみあまたありて)と書きのこしている。

故郷で春を迎えた芭蕉は、

○二日にもぬかりはせじな花の春 芭蕉

注 紀行文には、除夜に酒を飲んで夜ふかしをし、元旦は寝過したとある。

○春立ちてまだ九日の野山かな 芭蕉

注 切の描写を省略し、「九日」の語だけで早春の気分を表したところが、俳諧的。

○香にほへうにほる岡の盛哉 芭蕉

注 うに(泥炭)(この国のうに診し)と詠んだと

○手鼻かむ音さへ梅の盛哉 芭蕉

注 雅と俗の取り合わせに意欲を示した句。

○枯芝や、かげろふの二三 芭蕉

注 自然界が動きだす兆候がとらえられている。

○あこくその心もしらず梅の花 芭蕉

注 あこくそ(紀貫之の幼名)心も貫之の「人はいさ心も知らず古里は花ぞ昔の香に匂ひける」(古今集)を踏まえる。

童名により、自分たちの交流が幼少時からのものであることも示唆される。

○文六にかげろふ高し石の上 芭蕉

○咲乱す桃の中より初桜 芭蕉

○初ざくら折しもけふは能日なり 芭蕉

注 伊賀上野の薬師寺での最初の月例句会

○さまざまの事もひ出す桜哉 芭蕉

この句で知られるように、伊賀のあちこちを探訪して若き日の思い出にひたつた。

注は(角川文庫)芭蕉全句集より。この訳注があつて始めて芭蕉の俳句の心が知れた思いがする。(訳注者 佐藤勝明・雲英末雄)

## 「氷魚」のことから (247) 岡本八千代

今こそ、世界中の人々がコロナ禍のために苦しめられている。その人その人に運命的なものがあるから、どうすることもできない。

私の住む海辺の小さな小さな町にも及んで来て、老人は外出禁止の日々が続く。とうとう私もワクチンを注射することになった。まだ注射できる体であったことに感謝する。

さて、今回は、「今甦る茂吉の心とふるさと」（茂吉没後50周年事業実行委員会・短歌研究社）という題名の本の中より基づいて、「医師と、歌人としての茂吉のことを書くこと」にした。

それは、当時、医者として働き、また文学者としても活躍したということは非常にむづかしいことであった。茂吉のことで、その基調講演（第三回）の時、「医師・歌人としての茂吉」と題して、加賀乙彦（作家・医師・日本芸術院会員）氏が話されたことをまとめてみる。

○茂吉は、28歳で帝大の医学科を卒業した。

○卒業してすぐ巣鴨病院の医師になった。

○当時は、本郷の大学附属病院には精神科が無かった。巣鴨には医局があった。

○茂吉は、東大の助手（助手の前身）と、府立の巣鴨病院の医師として、同時に東大の医師として、二重の生活をした。

○その中で第一歌集「赤光」を書いて歌人として有名、医師としての生活もした。故に「赤光」の中には、精神科医としての生活が随分描かれているのだった。

自殺せし狂者の棺のうしろより眩暈して行けり道に入り  
日あかく（赤光）

などの歌があるのだった。

加賀乙彦氏は「文学の中には、現実の世界とは違ったイマジネーションを膨らますことによつて描き出すというような傾向がいつもあると思うのです」また、「だから、医学界において、文学というのはむしろ退けられるもの」とも思っている。そうかもしれないけれど、私は、もう時代はずいぶんちがってきている。医と文学の両方を実践しつつある医の先生方も多せいあると思っている。

医者であり、詩人である。医者であり歌人である。医者であり哲学者であり、とかその両立を着々と成しとげつつある先生方の多いことを。…。

実は私、医者であり、アララギ歌人であった御津磯夫（ペンネーム）先生に師事した。今思うと、歌会の時に、いろいろな事々を何にも知らなくて、よく恥をかいた。そのたびに皆さんに笑われたり、叱られたりしたが、どうしたものか、泣けてきたことは一度もなかった。むしろ楽しかった。不思議なことだった。

御津先生のことばを思い出した。「歌は常に私たちの眼の前にあること。朝も昼も夕も心を働かせてをれば、歌はいくらでもそこにあるのだ」を。——「なるほどなあ」と私。

アルゼンチンつれづれ (140) 1990年7月号 今泉由利

マラソン短歌―日本国よりアルゼンチン国へ着くまでの短歌。

急にアルゼンチンまで行く用事が出来た。「明日行ってくる」と宣言すると、飛行機の手配、美容院の手配取り消し、デート断わり、絵描きさぼり……とかなり慌ただしく受話器を取った。いつも用意する「気軽な読み物」が手元になかったから、ロサンゼルスから二日間かかってアルゼンチンに着くまで、「マラソン短歌」を思いついた。歌といえるかどうか。とにかくとにかく……。

- 飛行機に乗るたび気弱く思ひをり今が接点私の生死
- 真昼間のフライトなればアメリカの砂漠見てゆくマイアミまでを
- 母と姉との終りてしまし世の中を続けています飛行機に乗りつつ
- 晴天も雲に隠るる地域もあり本物地球を見下ろしながら
- 出来たてのやわやわ白き雲の中一時間ほどただ白く飛ぶ
- 無事に無事に水平飛行に移りたりドライシエリーに肩ほぐしつつ
- 人の住む気配の無かりし砂の地も道ひとすじは続く続く
- 安全を確かめ我が家を後にしてもう惑わぬ帰り着くまで
- 地図持てば名前ありなん山中の小さき村の上空にいる
- 乾燥の機内に備え常の日の倍のクリームつけて私
- 穏やかな空を飛びつつ戦いの映画見ているおしきせなれば
- ガムを噛みペプシコーラをがぶ飲めるアメリカの人隣にいたり
- 星々の光り始める少し前空も暗い地球も暗い
- 砂漠色に慣れし我が目に緑色ブラジルの山は濃き濃い緑
- 濃緑のブラジルを見下ろして飛ぶ時は出来たて空気の中にあること
- 絵葉書と同じ景色の見えているリオデジャネイロは低空飛行

- ブラジルの朝の太陽我が窓にきたりて小さき虹作りゆく
- イバネマもコパカバーナも見下ろしてその砂サラリ踏みしことあり
- スペイン語ポルトガル語と英語にて飛行アナウンスサンパウロまで
- 砂漠にも緑深き山中も地球に道を作るよ人間
- あちこちに代赭色の垣の見えブラジルの土に深緑萌ゆる
- 原産の国にきたれば背高くてハカランダの木蔭大きい大きい
- ノボタンの背高き梢に花ありてノボタン色のブラジルにいる
- オルガンを作る工場も我が家業ブラジルでの時背筋のばして
- ブラジルのワインたちまち飲み干しぬもう一つの自宅サンパウロにて
- ブラジルを赤く明るく紅くする巨大夕焼に私も赤い
- ひょうきんなトックリ椰子も無造作に道端にありサンパウロの街
- アマゾンの闇を見つめて飛行中見えない物に心通わせ
- アマゾンの深き闇を飛びながらチョコレート食むコーヒーを飲む
- 緊急の着陸といえどアマゾンの木々の見えない闇恨みつつ
- ブラジルのワイン造りの本なども旅に加わるアルゼンチンまで
- 私の足下にワンと感じられ我が飛行機に犬も乗るらし
- どれ程の電気消費の量かしら地球の夜を眺めつつ飛行
- L A・マイア・ミリオ・サンパウロ・緊急着陸・プエルトアレグレ・ブエノスアイレス
- ショボショボと目許疲れに比例して目的の地に近づいている
- 疲れゆく目許着ている洋服に皺増え増えて目的地まで
- 窓側を選び坐りて昼も夜もこよなく地球を見めていたり
- 何国の何時時刻か失えり時差むつかし身体と時計に
- 髪直し常の私に戻るべし関わり長きアルゼンチンに着く
- 夥しいブエノスアイレスの灯の中私の家の灯を加う

## 「三河アララギ」について

- ◇三河アララギ発行所 〒一四一・〇〇二二  
東京都北区王子本町一・二六・六・A  
TEL 〇三・五九二四・二〇六五  
ケイタイ 〇九〇・八四三四・八六四六
- ◇URL <http://imazumiyuri.jp/>  
E-mail [yuriiimazumi@jcom.zaq.ne.jp](mailto:yuriiimazumi@jcom.zaq.ne.jp)
- ◇編集・発行 今泉由利
- ◇三河アララギ誌は毎月発行します。
- ◇どなたも参加、投稿いただけます。  
編集室までご相談ください。
- ◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、  
メール、お届け下さい。
- ◇会費制は廃止。
- ◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、  
創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アラ  
ラギ」誕生。
- ◇令和三年現在まで一号の欠刊なく、続けてき  
ました、続けてゆきます。